第 41 回加藤周一文庫公開講読会
2023 年 12 月 16 日

『続羊の歌』「京都の庭」（後半）

立命館大学大学院文学研究科　福井 優

第 5 段落　病床での母・織子

私の母の健康がすぐれなかったことはまえにもいったが、心臓を病み、時折り自律神経失調の複雑な症状も呈していた。そういうことが長く続いていたあとで、母は胃癌を患った。本郷の大学病院で手術をし、手術は、心臓の障害にも拘らず、うまくいった。しかしそのときに転移の有無を知ることはできなかった。転移が無ければ、母はまだ若かったから、どれほど長く生きたかわからない、転移があれば、数ヵ月の寿命で、助ける方法はなかった。そのとき私は父と相談をして、本人には、手術の結果が癌ではなかったと説明することにした。それは医者の常識にすぎない。しかし退院して目黒区の借家に帰り、思ったより元気に、手術後を養っている母の顔を見ると、私には病気の話をするのが苦痛であった。「胃潰瘍のあとがあって、そこから胃癌になることもあるから、念のために切りとったのですよ」と私はいった。「それならまもなくよくなるだろうね」「もちろん、よくなるさ」といいながらも、私は転移の可能性を考えていた。つかの間の生命……であるかもしれないということを、私だけが知っていた。母は病床で歌をつくり、帳面にそれを書きとめて、日記をつけるようなものだといっていた。そのなかには、子供たちが育ったので、たとえ死んでも思い残すことがないというものや、また娘は誰にも好かれる性質だから、心配がないけれども、息子の性質は激しいので、将来が思いやられるというものもあった。その母は旅を好み、生涯にほとんど旅をすることができなかった、来客を好み、客を迎えることも少かった、美食を好み、今ではただ流動食と注射によって栄養を保ち得るにすぎなかった。それでも隣に住んでいた叔母や毎日訪ねてきた私の妹と喋りながら、その楽天的な明るさを最後まで失わなかった。私は冗談をいって、病室の人々を笑わせながら、同時に広島を想い出していた。一度無事をよろこんだ人々の原爆症は、数週間の後にはじまる。原爆症は、九死に一生を得たよろこびの絶頂において、全く思いもかけぬときに、第二の爆弾のようにやって来て、人々を打ちのめす。……私は母の生命のある間に、母のためにできることは何でもしたいと思ったが、できることは、もはや不幸がおこらぬことを祈るより他に何もなかった。

（38～39 頁、改 43～45 頁）

（1）母・織子の病状

- もともと心臓を病んでいた母・織子（1897～1949）は、1949 年の春先に胃の噴門部に癌が見つかる[1]。手術は一応成功し、退院後は目黒区宮前町の借家で療養することになるのだが……
- 加藤周一（1919～2008）は父と相談のうえ、織子には手術の結果は癌ではないと説明し、「もちろん、よくなるさ」と励ましつつも、医者であるが故に「転移の可能性を考え」、「つかの間の

[1] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか――『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018 年、346 頁。

生命……であるかもしれない」とも思っていた

（2）病床での母・織子の様子

◦病床の織子は歌をつくっていた。そのなかには、子どもたちに関するものも
→1949 年 5 月 30 日条「MAY 30th」『JOURNAL INTIME 1948 1949』（後掲）には、手術後に織子が詠んだ歌が貼付されている
「母が命守らんとして手術場にまやく否みて子は断固たり」
「つよき兄やさしき妹よ母は今しみじみ己が幸を知りたり」

◦対照的な表現で母の無念や薄幸が表される。それでも母は「その楽天的な明るさを最後まで失わなかった
「旅を好み」　⇔「生涯にほとんど旅をすることができなかった」
「来客を好み」⇔「客を迎えることも少かった」
「美食を好み」⇔「今ではただ流動食と注射によって栄養を保ち得るにすぎなかった」

（3）なぜ、病室で「広島を想い出していた」のか？

◦「放射線にも三段階あって、大量に浴びると即死します。次に来るのは、強いといっても生き延びることは出来ます。二、三ヵ月間はなんともない。ところが、それを過ぎると発症します。なぜなら放射線は細胞を、それも若い細胞を段階的に破壊するからです。ですから古い細胞と若い細胞が入れ替わる二、三カ月後になると、入れ替わるべき若い細胞がなく、発症するのです。／これが広島周辺の村に帰った人たちに起こったことでした。非常に残酷です。彼らを迎えた家の人たちは「運のいいことにうちの子は助かった」と大喜びしたのに、二、三ヵ月すると症状が出てくる。「どうなるでしょうか」と聞かれても治療法がなく、医者としては「これは死ぬかもしれない」としか言えません。」[2]

◦広島における原爆症≒術後良好と思われた母の症状は、一転して悪化するかもしれず、そうなれば、もはや手の施しようはない⇒医者としての自己の無力

第 6 段落　母の死による心境の変化①

しかし母の病状は、手術から充分に恢復しきらぬうちに、悪化しはじめた。もはや希望的な観測をする余地はなかった。転移があり、その病状が現れてきたので、病人を救うみちはない。「だんだん苦しくなる」といわれると、私には返す言葉がなかった。母の苦痛をいくらかでも和らげるために、また少しでも長くその生命をひきのばしておくために、そもそもその二つの目的を調和させるという不可能な仕事に、私は精魂を費い果した。見るに忍びない苦痛を見ることで、私の考えは乱れ、父と相談して辛うじて当座の処置を決めると、もはや他の何を考えることもできなかった。そういう数週間が続き、苦しみの果てに、母が死んだとき、私は自分の内側が空虚に

[2] 加藤周一『二〇世紀の自画像』ちくま新書、2005 年、112～113 頁。

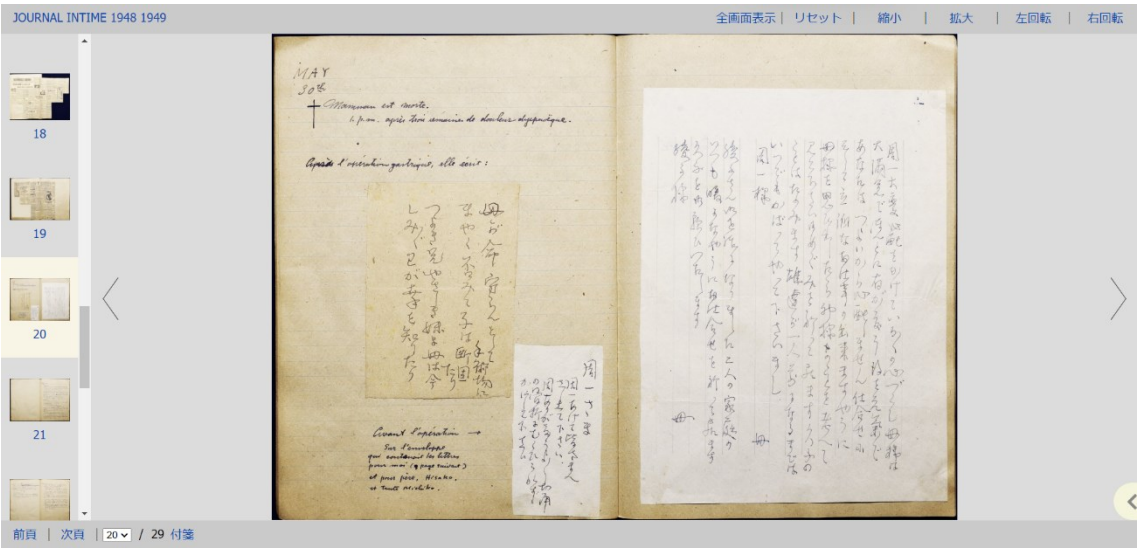
なったように感じた。よろこびも悲しみも感ぜず、ただ全身に拡る疲れだけを感じ、しばらくの間、放心していた。葬式はほとんど覚えていないのは、周囲におこる何事にも関心を失っていたからだろう。まもなく本郷の病院へ通って仕事を続けていたにちがいないが、その記憶も、はっきりしない。はっきりした記憶は、夜ひとりになると、その顔や、その言葉が、秩序なく甦り、そのすべてを失ったということ、そのすべてがかえらぬということが、実に堪え難く感じられたということだけである。私の世界からは、無限の愛情の中心が消えてなくなり、世界はもはや私にとってどうなってもよいものにすぎなくなった。毎日見慣れたどぶ川のほとりの景色は、真昼の白い光のなかで急に色を失い、どこか見知らぬ土地の私とは何の関係もない町の景色のようにみえた。私の内部には過去があり、それこそは現実であって、外部には夢があるにすぎなかった。（39～40 頁、45～46 頁）

（1）母・織子の死

◦加藤の献身的な治療や看病の甲斐なく、織子は、1949 年 5 月 30 日午後 1 時に亡くなる。享年 52 歳だった（父・信一は 1974 年 4 月 22 日に亡くなる）[3]

◦「MAY 30th」『JOURNAL INTIME 1948 1949』（1949 年 5 月 30 日条）

→「十字架と、母が死んだという言葉がフランス語で書かれる。そこにはヲリ子の手紙や歌、封筒に書かれた加藤宛のメッセージが貼りつけられていた。加藤はヲリ子が 3 週間にわたって呼吸困難で苦しんだ後に息を引き取ったこと、手紙は胃の手術の前に託されたことや、誰に宛てた手紙が入っていたかを書き留めている」[4]



「立命館大学図書館／加藤周一文庫デジタルアーカイブ」https://adeac.jp/ritsumeikan-univ-lib-KatoShuichi/catalog/mp000427

[3] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』346 頁。

[4] 半田侑子「近代日本知識人の「母」――加藤周一の母・ヲリ子と「無限の愛情の中心」」『加藤周一現代思想研究センター報告』1 号、2023 年 12 月刊行予定、131～132 頁。

◦「遺書」ともいうべき織子が手術前に書いた手紙

「周一大変心配をかけていろいろの心づくし母様は大満足でほんとに有が度うね　を元気であなたはつよいから心配しません　仕合せ尓　そして立派なお仕事の出来ますやうに　母様を思ひ出したら神様のことを考へて見て下さい　御めぐみを祈って居ます　久子のことはたのみます　雄達が一人前になるまではいつでもかばってやって下さいまし

周一様　　母

綾子さん御世話になりました　二人の家庭のいつも暖かなやうにお仕合せを祈って居ます久子を御願ひいたします

綾子様　　母」

(2)「母が死んだとき、私は自分の内側が空虚になったように感じた」

◦加藤は母の死の直後、放心状態となった。その一方で、「夜ひとりになると、その顔や、その言葉が、秩序なく甦り、そのすべてを失ったということ、そのすべてがかえらぬということ」だけは強く感じられた→「私の世界からは、無限の愛情の中心が消えてなくなり、世界はもはや私にとってどうなってもよいものにすぎなくなった」

◦その強い喪失感を、見慣れた景色から受ける印象が変化したと加藤は表現する

加藤一家のポートレート、加藤周一文庫蔵

第 7 段落　母の死による心境の変化②

しかし時が経つにつれて、私は母の死をも落着いて考えることができるようになった。そのときはじめて烈しい後悔がやって来た。これをしておけばよかった、あれをしてやればよかった、という考えは尽きず、その一部は到底不可能であったとしても、少くとも他の一部は、私にその気さえあればできたはずだとくり返し思った。私は自分自身を憎み、且軽蔑した。しかしそれだけではなかった。私はまた同時に、私自身の生涯を、母の死を境として、その前後に別けて考え

るようにもなったのである。その前と後とで、私の生きて来た世界のいわば重心が変った――ということに気がついたときに、その考えは私自身をおどろかせた。それまで私が母に頼って生きていたのではなく、むしろ母が私に頼って生きていたのだからである。しかし母を失ってしばらく経って後、私は無条件の信頼と愛情のあり得た世界から、そういうものの二度とあり得ないだろうもう一つの世界へ自分が移ったことをはっきりと感じた。信頼はあらためてつくりだし、愛情はあらためて探しもとめなければならない。京都の女(ひと)は、その事実を少しも変えるものではなかった。 (40～41 頁、改 46～47 頁)

(1) その後の心境の変化…「烈しい後悔」とそれに伴う自分自身に対する「軽蔑」

◦第 5 段落の「その母は旅を好み、生涯にほとんど旅をすることができなかった、来客を好み、客を迎えることも少かった、美食を好み、今ではただ流動食と注射によって栄養を保ち得るにすぎなかった」とも対応する

◦「加藤は晩年に至るまでしばしば、母織子に「これをしておけばよかった、あれをしてやればよかった」と、その都度涙ぐみながら話したという（本村久子氏談)。半世紀以上のあいだ変わらずに、こういう感情を保ち続けることは稀だろう」[5]

(2) その後の心境の変化…「私自身の生涯を、母の死を境として、その前後に別けて考えるようにもなった」「その前と後とで、私の生きて来た世界のいわば重心が変った」

◦「その考えは私自身をおどろかせた」とあるように、加藤は母を亡くしてから、その存在が自身にとっていかに大きかったかを認識した→「私は無条件の信頼と愛情のあり得た世界から、そういうものの二度とあり得ないだろうもう一つの世界へ自分が移ったことをはっきりと感じた。信頼はあらためてつくりだし、愛情はあらためて探しもとめなければならない」⇒『続羊の歌』の今後の展開を暗示させる表現

◦『羊の歌』における母と父の扱いは対照的。「『羊の歌』でも二・二六事件以後、父親は二度と姿を現さなくなる」[6]→加藤の母に対する強い「愛情」は終生、変わらなかった

◦「人物記」『ノートⅤ』(1939 年 6 月～9 月)

「父　私は父の或る性格を攻撃して、それを理解しようとしなかった。理解出来ると云うことを余りによく知っていたからだ。」

「母　母は勿論私よりも偉い。私は母の何物をも理解しないが、その偉さだけは理解している、母の愛情だけは。」[7]

◦「私が小学生だった時」(2006 年 9 月 21 日)

「私が小学生であったとき、母に抱かれて経験した「愛」は一般的抽象的な概念を媒介して自覚されてはいなかったが、母から私への、私から母への、あたたかく、確かで、自発的な、あ

[5] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』347 頁。
[6] 海老坂武『加藤周一――二十世紀を問う』岩波新書、2013 年、153 頁。
[7] 鷲巣力・半田侑子編『加藤周一青春ノート　1937–1942』人文書院、2019 年、106 頁

ふれるような感情であった。それはあまりにも深い内面的な心情で、それを外面化し、制度化し、公教育に結びつける可能性を、私は想像もしなかった。／その後私は女の眼の中に同じような「愛」の輝きを見たことがある。同じような――ではあるが、母の表情が静かで確かだったのに対し、激しく圧倒的な、ほとんど破壊的な心情であった。」[8]

第 8 段落　母とカトリック信仰①

母の臨終には神父が立会って、しかるべき手続きをふんだ。カトリックの信仰は――あったろう、と思う。また現にそう考えたから、みずから信者でない私も神父を呼ぶことに賛成したのである。しかし今私が、母には信仰が「あった」、という代りに、「あったろう」と書くのには、理由がないわけではない。その一つは、「信仰」という言葉の内容そのものが、その経験を離れては、おそらくわかりにくいものだからである。またたとえそういうことを別にして、母が神を信じていたと考えるにしても、その神の性質は、おそらく娘のときに母がカトリックの学校で教えられた神からは、大いに変ってきていたろうと思われるからである。「おまえたちが二人とも信者になってくれればいいのに」と母は冗談めかしていうことがあった、「死んでもまた天国で会えるからね」――「だって、天国に行けるかどうかわからない……」と妹はいった。「いいえ、心のよい人は、きっと天国へ行けると思うよ」と母はいっていた。そこから、信仰があってもなくても、心のよい人、行いの正しい人が、天国へ行けるだろうという考えまでは、遠くなかったろう。事実妹も私もカトリック信者にならないことがはっきりして後、母はそういう考えに傾いていたように思われる。子供たちの善意をかたく信じていたので――それは少くとも母自身に対する限り理由のないことではなかったろう――善意を罰する善（神）があるとは、考えられなかったらしい。「神父様のお話にもおかしいところがあるね、何でもこの世のことが思召しで片づくとしたら、子供の死ぬのも思召しになってしまう……」といったこともある。そして、「神父様にもいろいろあり、あまり深く考えていない方もあると思う」などとつけ加えた。特別の機会がなければ、教会へも行かず、日曜日に教会へ行くことはほとんどなかった。「そういう形の上のことよりも、心のもち様だと思いますよ」。　（41～42 頁、改 47～48 頁）

（1）母のカトリック「信仰」の有り様

◦織子は、1910 年に「雙葉高等女学校[9]に中途入学しカトリックに触れ、二〇歳頃に生死の境をさまよう大病を患い、そのときに入信した」[10]という

---

[8] 加藤周一「私が小学生だった時」『夕陽妄語 3　2001–2008』ちくま文庫、2016 年、323 頁。

[9] 「雙葉高女は明治 42〔1909〕年設立だが、明治 40 年から明治 45 年までの間に九段・仙台・盛岡の白百合、四谷と静岡の雙葉、大阪の信愛、東京の聖心、これらの高等女学校が創設された。17 世紀のパリで、貧しい子女の教育を目的として発足したサンモール修道女会が、東京ではブルジョワ層に根付いていく。大正期の家族問題は、西欧化を享受した都会の市民層と農村の貧しい小作農との間に厳しい落差を生んだ。キリスト教界も、都会のブルジョワ信徒と長崎の貧農とに両極分解する」（吉澤昇「親の宗教と子の信仰と」『研究室紀要』38 号、東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室、2012 年、67 頁）。

[10] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』10 頁。

◦しかし、加藤は「その神の性質は、おそらく娘のときに母がカトリックの学校で教えられた神からは、大いに変ってきていたろうと思われる」と述べ、母の「信仰」の内容が変化していることを示唆する→織子は、加藤と久子が入信することを望んだが、それがないことが明確になってから、「信仰があってもなくても、心のよい人、行いの正しい人が、天国へ行ける」という考えに傾いていった

◦織子が加藤と久子ら子どもたちに信仰を強制しなかったことは、「教会から見ると、異例」[11]。また加藤によれば、織子は時に神父の話に疑問を持つこともあり、また日曜礼拝に教会へ行くことはほとんどなかった⇒一般的な敬虔なカトリック信者とは異なっていたと思われる、織子のカトリック信仰の実態はどのようなものだったのか？

(2)「事実妹も私もカトリック信者にならないことがはっきりして後」

◦織子は死に臨んで、加藤と久子の入信について、加藤の大叔父にあたる元海軍中将の岩村清一の長女であり、カトリック信者であった美代に託した。織子の遺志は、美代から 2 人に伝えられたという[12]

◦執筆された 1967、68 年の時点では、加藤も妹・久子もカトリック信者ではなかったが、その後、久子は 70 歳を過ぎてから入信し、加藤も亡くなる直前の 2008 年 8 月に洗礼を受けており、結果的に織子の望みは叶うことになる

第 9 段落　母とカトリック信仰②

父は行動の上では母を説得することに成功していたといえるだろう。しかし無神論の考えにおいて説得することはできなかった。私自身はそうする何らの必要も認めず、不幸にして母と同じ信仰をもつことができない、と考えていた。母が死んで何年も経った後にも、私はしばしば、自分の死を考えるときに、何の理由もないのに癌で自分は死ぬのだろうと思い、そればかりではなく、もし天国というものがあるとすれば、母はそこにいるにちがいなく、もう一度そこで母に会えるかもしれないと考えることさえあった。　(42～43 頁、改 48 頁)

(1) 無神論者の父・信一とカトリック信者の母・織子

◦『羊の歌』では、徹底的な無神論者であり合理主義者であった父と、敬虔なカトリック信者であった母との間で、日常生活の様々な場面において意見対立があったことが描かれる→例えば、「渋谷金王町」での加藤をカトリック系の幼稚園に入園させるか否かを巡る対立（33 頁、改 37～38 頁)、「美竹町の家」での祖父の女性関係や愛を巡る意見対立（85 頁、改 96 頁）

◦父は母に対して、日常生活の「行動」の上では説得に成功していたが、「無神論の考え」においては説得できずに終わったと、加藤はみる

[11] 吉澤前掲「親の宗教と子の信仰と」68 頁。

[12] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』25 頁。

(2)「私はしばしば、自分の死を考えるときに」、「もし天国というものがあるとすれば」

- 父の影響を受けていた加藤は、「私自身はそうする何らの必要も認めず、不幸にして母と同じ信仰をもつことができない、と考えていた」が、しかし……⇒父の無神論的合理主義では解決できない「死」という問題に当面するとき、加藤は母やその信仰に思いを馳せる
- 「何の理由もないのに癌で自分は死ぬのだろうと思い」→加藤の予感通り「晩年、母織子と同じ胃がんを発症し、その原発部位は母と同じく噴門部だった」[13]

第 10～11 段落　渡仏の決意

私が京都へ行くことを、母は好んでいなかった。しかし私は結婚を考えていた。しかしまた西洋見物の望みも母の死後に、いよいよ強くなろうとしていた。大学の医学部では、米国留学が漸くはじまろうとしていた頃である。もしそのときに私に米国留学の機会があたえられていたら、私は米国の大学の研究室で研究に没頭し――研究の余暇には庭球場で汗を流し、自然科学者として今日に到っていたかもしれない。そのときすでに私は東京で学位を得ていて、条件のよい研究室で仕事に没頭するのに充分なほどの関心を専門の領域に抱いていた。しかし私はみずからそういう機会をもとめず、もとめない機会はやって来なかった。私がみずからもとめたのは、医学研究のことを離れても、その国の本を読みつづけてきたフランスへ行き、しばらくそこで暮すことができる機会であった。そういう機会は、占領下の日本では、多くなかった。戦後第一回のフランス政府給費留学生は、公募ではなく、推薦によった。その一人に択ばれたのが、仏文科の森有正助教授で、その留学は、森さんのその後の生涯を変えることとなった。第二回の留学生は、公募され、私はその試験を受けて、給費生としては落第し、「半給費生」としては通った。「半給費生」というのは、往復と生活の費用をみずから弁じれば、フランス政府が、学費を免除し、滞在許可その他の便宜をはかるというものである。その頃の日本政府には旅券を発行する権限さえもなく、一般の市民にとっては、たとえ費用をみずから負担しても、国外へ出ることが、不可能にちかいほど困難であったから、「半給費生」の資格は、その困難を除くという点で、大きな意味をもっていた。私にとっての問題は、必要な金をつくることができるかどうかということであった。私は昼夜兼行で翻訳をして旅費をつくり、行先から地方新聞に通信を送ってその稿料を生活費にあてることにした。もしそのとき京都の女が、私の外国へ去ることに強く反対していたら、おそらく私は出かけなかったかもしれないし、出かけなければその後の私の生涯も、変っていたはずであろう。しかし彼女は反対しなかった。私を引きとめようとしなかったばかりでなく、私の旅行について一言も不平もいわなかった。私はそのことに一種のもの足りなさも感じたけれども、それ以上に、強く心を動かされた。私はその旅行がわずか一年にすぎないといい、向うから絶えず手紙を書くと約束し、もし彼女が私を必要とするときにはいつでも帰って来るつもりだといった。「帰って来たら、結婚を考えよう」「そうね、帰って来たら……」と彼女はいった。東京では私の文筆業がはじまったばかりであった。京都では長く親しんできた詩歌とこの国

[13] 同前、349 頁。

の風土との間に、微妙なつながりを漸く見出そうとしていた時である。私は西洋を実地に見聞したいとは望んでいたが、日本を留守にしたいとは決して考えていなかった。それまでの生活と仕事を一年以上も中断するつもりは少しもなく、そのとき彼女にいった言葉をみずから固く信じていた。その後自分がながく欧洲に暮すことになるだろうとは、いわんやその年月が私自身を根底から変えることになるだろうとは夢想さえもしていなかったのである。

私は何年も経ってから京都の庭へ帰ってきた。しかしみずからあれほど愛していると信じていたその女の許へは帰らなかった。（43〜45 頁、改 49〜51 頁）

(1)「西洋見物の望みも母の死後に、いよいよ強くなろうとしていた」

◦「そのときすでに私は東京で学位を得てい」たとあるように、加藤は「X 線大量照射がモルモットの造血器官に及ぼす影響の病理」という論文で、1950 年 2 月 2 日に東京大学より医学博士の学位を授与されていた→しかし医学研究の先進国であった米国への留学ではなく、「私がみずからもとめたのは、医学研究のことを離れても、その国の本を読みつづけてきたフランスへ行き、しばらくそこで暮すことができる機会であった」⇒その理由は、「京都の庭」を見たことにより生じた、「西洋の文化と遠い昔の日本の文化とは、私にとってどうちがうのか」という問いに答えるため（第 4 段落）

◦なぜその希望が、「母の死後に、いよいよ強くなろうとしていた」のか、ここでは明確に記されていない→「大学進学にあたり加藤が文学部への進学を望んだにもかかわらず、母織子の反対を受けて断念した〔……〕母の死をきっかけに、母の意思から離れて文学の道に戻ろうとしたのではないか」[14]

(2) フランス政府給費留学生

◦戦前に始まり戦争により中断していた「フランス政府給費留学生」制度は、1950 年に再開され、第 1 回の留学生として森有正ら 6 人が推薦で選出された→「その留学は、森さんのその後の生涯を変えることとなった」とあるように、森は当初留学に消極で 1 年経てば帰国する予定であったにもかかわらず、そのままフランスに留まり 1976 年 10 月にパリで客死する[15]

◦加藤は 1951 年の第 2 回のフランス政府給費留学生試験に、「半給費生」として合格→「私は昼夜兼行で翻訳をして旅費をつくり、行先から地方新聞に通信を送ってその稿料を生活費にあてることにした」。実際に後者の「地方新聞」は『西日本新聞』

(3) 当初の留学期間

◦「京都の女」は留学に反対しなかったものの、加藤は彼女との結婚の約束もあり、また仕事の面では、東京での文筆業が始まったばかりで、かつ「京都では長く親しんできた詩歌とこの国の風土との間に、微妙なつながりを漸く見出そうとしていた時であ」ったため、当初は 1 年ほ

[14] 同前、491 頁。

[15] 古賀通予「森有正の渡仏に見る西欧と日本」『国際日本学』20 巻、2023 年。

どで帰国する予定であった。しかし、その予測に反し留学は長期化する

- 「もしそのときに私に米国留学の機会があたえられていたら〔……〕自然科学者として今日に到っていたかもしれない」、「出かけなければその後の私の生涯も、変っていたはずであろう」、「その年月が私自身を根底から変えることになるだろう」⇒フランス留学（1951〜55）が、前半生を振り返る時に、分岐点となる出来事であったことが強調される。「京都の庭」と母の死がフランス留学の動機付けとなった
- 本章の最後は、「私は何年も経ってから京都の庭へ帰ってきた。しかしみずからあれほど愛していると信じていたその女の許へは帰らなかった」という一文で締めくくられ、留学先での新たな「愛」の芽生えと、「京都の女」との破局が暗示される